

ニューギニア インパチェンス ディバイン™・シリーズ

学名: *I. hawkerii*

種子粒数の目安: 558 粒/グラム

プラグ生産

培地

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。培地の pH は 5.8 から 6.2 の範囲とする。pH が 5.8 を下回ると、鉄やマンガンによる障害が現れるので注意しましょう。EC は 0.75mmhos/cm(1:2)を維持する

播種

128 から 288 穴のサイズのプラグトレイを推奨。播種後は十分に水を与える。通常覆土はしないが、粗めのパーミキュライトで軽く覆土した方が種子のまわりの相対湿度を高く維持できるため、より良い発芽には役立つ

ステージ 1 - 発芽日数は温度にもよるが、概ね 5 から 8 日を要する。幼根が 8 割ほど現れるまでプラグトレイを発芽チャンバーで管理する

地温: 23 から 25°Cの範囲が催芽と発芽揃いに最適な条件。温度が低いと催芽や揃いなどに良くない影響が出る。また 29°C以上の高温は避ける

光条件: 光は発芽時には有益にはたらく

水分: ステージ 1 では培地の水分レベルを湿潤の level 5 に維持する

湿度: ステージ 1 では相対湿度を 100%で維持する

ステージ 2

温度: 21 から 23°C

地温: 22°C

光条件: 26,900 ルクス(2,500 f.c.)または DLI(日積算光量)を 5 から 8moles m⁻² d⁻¹を上限とする

水分: 水分レベルをは適度に湿潤(level 4)と標準(level 3)を反復的に維持する。極端な乾燥や過湿は避ける

湿度: 相対湿度を下げて管理するが、最低湿度(とくに夜間)は 75%とする

肥料: リン酸の低い硝酸態の肥料(13-2-13 や 17-5-17 など)を 50 から 75ppm/N(EC は 0.4-0.6mS/cm)の濃度で与える。リンの濃度は一貫して 8 から 10ppm で与える

ステージ 3 から 4

気温: 21 から 23°C

地温: 22°C

光条件: 54,000 ルクス(5,000 f.c.)を上限とする。DLI(日積算光量)を高くする(10moles m⁻² d⁻¹)ことがプラグの品質を高め、また生産期間全般の短縮にもつながる

水分: 湿潤から標準(level 5 から 3)を反復的に継続する。極端な乾燥や過湿は避ける。ニューギニアインパチェンスは、一度苗が枯れると立ち直らないので注意する

肥料: 肥料濃度を 65 から 75ppm/N(EC は 0.5から 0.6mS/cm)に上げる。リンは一貫して 8 から 10ppm の濃度で与える。培地の pH は 5.8 から 6.2, EC は 1.0 から 1.5mS/cm を維持する

矮化剤(PGR): ニューギニアインパチェンスは、マイナス(ネガティブ)DIF や DROP(温度の低減)がとても効果的に寄与する。矮化剤が必要な場合は、最初の本葉が展開した時点で B ナインを 1,250ppm で散布する。環境が整っている場合は、3,750ppm までの濃度で追加散布も可能。また、本葉展開のタイミングでボンザイをごく薄く(1, 2ppm)散布することも可能である

苗の移植: プラグの状態で長く放置すると開花が遅れることがあります。根詰まりをさせないように十分に注意する

鉢上げから出荷まで

コンテナサイズ

ディバイン・シリーズは、カットバックをはじめ、9から 10.5cm また 15cm などのやや大きなポットでも可能

培地(用土)

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。培地の pH は 5.8 から 6.2 とする。pH が 5.8 を下回ると、鉄やマンガンによる障害が現れるので注意する

温度

鉢上げから出荷までの期間は、日中温度(気温)は 20 から 24°C、夜間温度は 18 から 20°Cを維持する。また、平均昼間温度(ADT)は 20 から 23°Cを維持する。温度を高くするとそれだけ開花までの短くなるが、花卉の大きさがいくぶん小さくなる。一方で、低温条件では開花期間は長引くが花は大きくなる。29°Cの平均昼間温度で、高温による開花の遅れが発生するので注意する。ディバインは14°Cの低温でも株は育つが、発育が緩慢になり、生産期間がかなり長期化するので注意する

光条件

適度な温度に置かれている場合は、できるだけ高い照度で管理する。ディバインの開花は、日長にニュートラルである。日積算光量(DLI)を高める(DLI \geq 10 から 15 moles $m^{-2} d^{-1}$)と、花芽数や分枝数の増加につながる。一方、日積算光量が低いと開花が遅れることがあるので注意する

湿度

相対湿度は 75%以上を維持する。これは、とくに夜間の温度変化に対応するもので、湿度を高く保つことで設定温度の低下を防ぐ効果がある。相対湿度が 75%以下では、ハウスの周囲の環境によっては温度が低下するので注意する

培地の水分

ニューギニアインパチェンスは過湿に敏感な植物である。草丈の調節などのために、極端に乾燥ストレスを与えると、落花や花芽の喪失が起こるので注意する。概ね適度な湿潤から適度な乾燥(level 2 から 4)を反復的に継続する

肥料

ニューギニアインパチェンスは適度な肥料管理が求められる植物である。肥料が過剰な条件では、葉が良く育ち栄養生長に傾き、花数が減少する。また、リンの濃度は一貫して 8 から 10ppm で与える。EC は 1.5 mS/cm 以下を維持する。高アンモニウム、高リン酸の肥料は避ける。ハウスの立地条件や環境を見ながら、50 から 150ppm の幅広い濃度範囲で頻度を調整しながら肥料を与える。平均昼間温度(ADT)が低い条件では、より低い濃度の肥料を与える。苗は、塩類の蓄積を防ぐためよく適宜かん水することが望ましい。塩類が高度に蓄積すると、葉に斑点(bronzing)やカールが発生したり、葉先が焼けることがある

ピンチ

この品種は自然な分枝に恵まれているので、ピンチは不要です。ピンチすると、栽培期間が長引いてしまうだけなので注意しましょう

矮化处理剤(PGR)

矮化剤の使用は、光や温度の外部要因、品種やコンテナのサイズなどの条件によっては必要とされる

【アメリカ仕様】

ボンザイを 2 から 5ppm で 1,2 回散布すると、花の大きさを損なうことなく草丈の制御が可能。またボンザイを 0.125 から 0.25ppm のかん注でも同様の効果を得られるが、品種のもつ活力を弱める可能性がある(品種の活力の違いによって矮化剤の影響は異なる。右上の表を参照)。またニューギニアインパチェンスは、マイナス DIF や DROP によって草丈の伸長が効果的に抑制される。フローラルなどを用いて分枝を促進させる処理はとくに必要はない

【北西ヨーロッパ仕様】

ボンザイ系統の処理剤を 2 から 4ppm で 1,2 回散布で効果が確認されている。またニューギニアインパチェンスは、マイナス DIF や DROP によって草丈の伸長が効果的に抑制される

※ 大鉢やハンギングなどに大きく仕立てる場合は、下の表 1. で最旺盛のグループに属する品種以外は、矮化剤は原則として不要

※ 矮化剤の使用に際しては、実際に使用する前に、事前試験をおして最適な濃度や倍率を決めることが望ましい

表 1. ディバインシリーズにおける株の活力の違い

最旺盛な品種グループ	ブルーパール、オレンジ(銅葉)、スカーレット(銅葉)
中間的な品種グループ	チェリーレッド、ラベンダー、オレンジ、ピンクパール、スカーレットレッド、バイオレット、ホワイトブラッシュ
旺盛ではない品種グループ	バーガンディ、ピンク

矮化剤の使用については、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、法令や省令あるいは条例等を順守し、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法とるようになる

平均的な生産期間

発芽日数: 5 から 8 日(ステージ 1 の環境から移す前に 80%以上に幼根が発現しているかを十分に確認する)

播種から移植まで(128 から 288 穴トレイ): 5 から 6 週
移植から開花まで:

コンテナサイズ	288 穴プラグ 移植本数	春出荷	秋出荷 (暖地)*
カットバック 9cm ポット	1 本	6 から 7 週	8 から 10 週
10.5 から 12.5cm ポット	1 本	7 から 8 週	8 から 10 週
15cm ポット	1 から 3 本	8 から 9 週	9 から 11 週
25cm バスケット、 コンテナ	3 から 4 本	8 から 9 週	9 から 11 週
30cm バスケット、 コンテナ	4 から 5 本	8 から 9 週	9 から 11 週

* 平均昼間温度(ADT)が 29°C を超えると、高温による開花の遅れが発生するので注意する

予想される一般的な障害等

害虫: スリップス、アブラムシ、ファンガスナッツ、ハダニなど
病気: ピシウム、リゾクトニア、フィトフィトラ、ボトリティス、ウドンコ病、ミロテシウム、TSWV/INSV などの細菌・ウイルス感染による病気

※ ディバイン・シリーズは、国際種子連盟(ISF)によって定められた用語で指定されている、べト病(Downy Mildew)に対して高い抵抗力(HR)のあるニューギニアインパチェンスです

定植時のアドバイス

ディバイン・シリーズを定植する場合は、一般には日陰(あるいは午前、午後のどちらかが日陰になるような条件)に植えることが望ましいでしょう。ガーデンへの定植間隔は 20 から 25cm とします。花壇定植のほか、バスケットやコンテナ、またプランターなどにも使いやすい品種です

注意点:

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてご利用ください。生産された植物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤の使用についての記載はあくまでもガイドラインであり、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法とるようにしましょう

EC 値について: EC(電気伝導度)は、ピート主体の北米の用土を算出の基準としているので、条件によっては適合し得ない場合があります。